

2009年度総会資料

2010/03/13



北海道の労働と福祉を考える会

目次

1. はじめに		2
2. 今年度の活動概要		3
3. 夜回り活動	澁谷洋平	4
4. 炊き出し・相談会	小澤司	6
5. 今年度の調査について	松浦聡美	10
6. 寄せ場交流会の報告	糸田隆	12
7. 他団体との連携	長谷川喜哉	13
8. 学習会	中村江里加	15
9. 広報活動		16
10. 来年度に向けて	中村江里加	22
11. 私と労福会		23

1. はじめに

今年度も労福会は多くの方が係わり、多くの協力を得て地道に活動を続けてきました。一年を振り返ると、記憶にも新しい今年度の注目イベントは、11月末に催された10周年記念シンポジウムだったのではないのでしょうか。普段から新しい出会いが絶えないのが、当会の活動の特徴ですが、このシンポジウムを機に、当会の10年にわたる活動を積み重ねてきた先輩方と交流することができました。また、シンポジウムでは、他地域に先駆けて実効的なホームレス自立支援の体制を構築してきた、北九州ホームレス支援機構の奥田さんのお話を拝聴することができました。お話から、会員の一人ひとりが、当事者のお話に耳を傾けるのみでは見えてこない発想に触れることや、自立支援の一つの模範と比較して当会の未熟さや可能性を見出すことができたのではないのでしょうか。

私たちの活動に焦点を戻すと、札幌市中心部で出会う「ホームレス状態」の現状は厳しいままです。当事者のお話を聞けば、その人の「今」だけを問題にするのではなく、「過去」に何があったのか原因を見据えること、そして「今」を変えるために「将来」どうすればよいのか一緒に悩むことが必要だとわかります。時にその人の人生に大きく係わることになるかもしれないのが、私たちの活動です。しかし、気張らずに、私たちができることをコツコツと続けてきた一年でした。



(09.10. 3) 炊き出し・総合相談会の様子

2. 今年度の活動概要

5月10日	札幌市との意見交換会
5月30日	炊き出し・総合相談会①（札幌市、ハンドインハンドとの共催）
6月14日	臨時総会
6月27日	炊き出し・総合相談会②（札幌市との共催）
7月25日	炊き出し・法律相談会③（司法書士会との共催）
8月15日	札幌市との意見交換会
8月29日	学習会
9月12日	夏季人数調査
9月13日	札幌市との意見交換会
9月26日、27日	寄せ場交流会
10月3日	炊き出し・総合相談会④（札幌市との共催）
10月17日	寄せ場交流会参加報告会
10月31日	炊き出し・総合相談会⑤（札幌市、ハンドインハンドとの共催）
11月14日	ケースカンファレンス
11月28日	設立10周年記念企画
1月30日	冬季人数調査
2月20日	炊き出し・法律相談会⑥（司法書士会との共催）
通年	第1・第3土曜日に夜回り

3. 夜回り活動

当会の主な活動の一つに、夜回りというものがあります。

毎月第一、第三土曜日の 20 時に、札幌駅南口のアピアドームに集合して、札幌駅、大通、狸小路などの野宿者の多い地域を中心に回っています。参加人数に余裕がある場合は、郊外に拡大して夜回りをしています。回る際には、缶コーヒーなどを持っていき、配りながらお話を聞きにいらしています。また、近日中に炊き出しがある場合は、その周知も行っています。

夜回りをする際は、当日参加したスタッフを数人ずつのグループに分けて回る場所を分担しており、なるべく毎回同じ人が、同じ地域に行くようにしています。そうすることで、野宿者とスタッフの間に信頼関係を築くきっかけになり、また、初めて会う野宿者と毎回会う野宿者の見分けることができるというメリットがあるからです。

また、夜回りは継続的に行うことが大事です。そうすることによって、野宿者の方々と仲良くなることができ、信頼関係を築くことができます。

野宿者の中には、色々な話をしてくれる方、あまり話をしてくれない方など、色々な方がいます。定期的に会いに行くことによって、話をしてくれなかった方が心を開いて話してくれるようになり、より深い話を聞くことができ、また、打ち明けにくい相談を受けることもあります。当会との付き合いが長い方々もいて、夜回りの時間に合わせて顔を見せに来てくれる方もいます。

しかし、今の夜回りは、顔なじみの方々に会いに行くことが中心となっています。野宿者の方々が増えると言われている中で、特に野宿者の数が増えていない状況です。回るところが決まっているために新しい野宿者があまり見つかっていません。違うルートを回るなどして、回り方などを見直す必要があります。

次に、声のかけ方が課題として上がっています。札幌の野宿者は、見た目では見分けにくい部分があるので、野宿者ではなかったときの対応が難しいため、声をかけるかどうか迷うことがあります。そのため、野宿者に声をかけずに通り過ぎてしまうことが起きているかもしれません。そのため、どのように声かけをしていくのか考えなければいけません。

また、顔見知りの野宿者の声のかけ方についても、考えていかなければいけません。毎回、世間話などで終わってしまうことが多く、就労や生活保護などのコアな部分を聞き出せていない状況にあります。

他には、物資の問題もあります。毎回の夜回りにはパンとコーヒーを持っていらしています。しかし、ごく一部ですが、パンを受け取っても捨ててしまう人もいます。また、食べ物を提供することが自立を妨げるという意見もあります。そのため、当会では物資を渡すべきか否かと検討中です。中には本当に物資を必要としている人もいますので、当会の自立支援という方針から、物資に限らず、野宿者のニーズに合うような援助を考えていかなければ

ればいけません。

継続的に行い、参加者の増えてきている夜回りですが、このように課題もあります。それらの課題を見直し、定例化している夜回りを改善していかなければいけません。声のかけ方の問題や物資の問題があるにせよ、それらを手段として、結果としては当事者の相談にのって自立支援につながるような夜回りにしていくべきです。

表. 2009 年度 夜回り

日付	参加人数	出会えた人数(新しい野宿者の人数)					備考
		大通	狸小路	札西	札東	合計	
4月4日	15	4	14(1)	13(2)	15(2)	46	桑園2人 桑園1人 澄川1人
4月18日	16	5	15	8	18(2)	46	
5月2日	28	15(3)	14	7	16(2)	52	
5月16日	23	9(1)	16	6	12(2)	43	
5月30日	炊き出し開催のため実施せず						
6月6日	17	6(3)	15	14(1)	3	38	
6月20日	17	7(1)	20(1)	7	11(3)	47	
7月4日	22	11(1)	21(3)	9	8(1)	50	
7月18日	29	10	17	9(1)	10(1)	46	
8月1日	27	9(1)	14(1)	9(1)	6(4)	38	
8月15日	20	10	16	8	9(1)	44	
9月5日	25	6(3)	17	6	9(1)	37	
9月19日	24	5	15(1)	8	5	33	
10月3日	炊き出し開催のため実施せず						
10月17日	25	6(1)	17(3)	8(1)	11	42	
10月31日	24	8(4)	16	5	4	33	
11月7日	24	8(4)	16	5	4	33	
11月21日	20	6(1)	16	6	7	35	
12月5日	17	9(1)	14(1)	10(1)	9	42	
12月19日	18	4	10(2)	9	5	28	
1月2日	16	9(1)	8(1)	1	7	25	
1月16日	20	14	11	11(1)	3	39	
2月6日	22	5	10	8(1)	6(2)	29	
2月20日	炊き出し開催のため実施せず						

※()は初めて会う野宿者の数

4. 炊き出し・相談会

1. 概要

当労働と福祉を考える会では各種支援団体・行政機関と連携し、野宿者の人のための食事会（炊き出し）を年に数回、開催しています。来場者に温かい憩いの場の提供を行うと共に、スタッフと信頼関係を結び、自立への可能性を探る手伝いをするを目的として行われます。また当会に参加して月日が経たないスタッフにとっては、当会の活動内容と野宿者の現状を知る良い機会となります。

会場では食事提供のほか、生活物資の提供、衣類提供、健康・法律・就労など各種相談会、健康診断・散髪等衛生福祉の提供、またはクイズ・ビンゴ大会などのバラエティー企画、といったものが行われます。当日は最初に会場入口付近で食事提供が行われた後、各テーブルでスタッフと野宿者が談笑、その後娯楽イベントや、希望者は設置されている各相談ブースに参加していただく、といったような形で進行されます。

今年度の炊き出しは計 6 回行われました。（下表参考）

日時	内容	会場	来場者	特徴
5/30	衣類提供、健康診断、総合（精神保健・司法・法律・就労・生活福祉・定額給付金）相談、食事提供	アウ・クル（旧豊水小学校）	65 名	・札幌市、ハンド・イン・ハンドと共催。 ・パン（フードバンクから）の提供 ・BIGISSUE 販売員募集ブースの設置
6/28	衣類提供、健康診断、散髪、食事提供、総合相談	アウ・クル（旧豊水小学校）	68 名	・札幌市、ハンド・イン・ハンドと共催 ・BIGISSUE 販売員募集ブースの設置 ・散髪の提供
7/25	衣類提供、クイズ大会、散髪、司法・健康相談、食事提供	アウ・クル（旧豊水小学校）	69 名	・札幌司法書士会と共催 ・BIGISSUE 販売員募集ブースの設置 ・散髪の提供 ・健康診断の結果配布
10/3	衣類提供、健康診断、総合相談、食事提供	札幌市民ホール	62 名	・札幌市、ハンド・イン・ハンドと共催 ・市民ホールで初の実施

				・各種アンケートの実施（市からの委託）
11/7	衣類提供、散髪、食事提供	札幌市民ホール	73 名	・札幌市、ハンド・イン・ハンドと共催 ・札幌市民ホール夜間の部（17:30～21:00）で初の実施 ・散髪は市民ホールでは初めての試み ・健康診断の結果配布 ・この回からネットカフェで広告チラシを取り置いてもらう
2/20	衣類提供、クイズ大会、司法・健康・歯科相談、食事提供	かでの 2・7	54 名	・札幌司法書士会と共催 ・歯科相談の実施（初めて）

今年度の炊き出し来場者数は前年度までの 50～60 名程度を上回り、55～70 名程度でした。

2. 食事・物資の配布

会場で提供される食事は各炊き出し毎によって異なりますが、概ね豚汁、おにぎり、弁当、PET ボトルのお茶の内からどれか数種が提供される事が多いです。加えて会場では各テーブル毎に菓子類を置いています。また前年度で実施した当会スタッフが調理した食事の提供ですが、今年度では準備期間の都合から実施する事ができませんでした。好評を博しただけに、来年度以降では実施することを視野に入れていきたいと思っています。

提供している生活物資は石鹸、カップ麺（缶詰）、カミソリ、タオル、歯ブラシ、風呂券、割り箸といったものがあげられます。提供する物資の中身については毎回議論が行われており、野宿者の石鹸は必要ないとの声を反映し、10 月以降の炊き出しでは石鹸は提供しなくなりました。また風呂券に関しては生活保護者の来場者にまで風呂券を提供すべきかという声が一部野宿者・スタッフ双方から寄せられており、提供の是非が議論中です。

3. 相談会

5、6、10 月の炊き出し・総合相談会では札幌市との共同開催ということで、区役所職員による生活・福祉相談や 11 月まで申請が行われた定額給付金相談、ハローワーク職員による就労相談、札幌弁護士会による法律相談、札幌こころのセンターによる精神保健相談と、多彩な相談会が行われました。また同様に市と共催して行われた 6 月、10 月では健康診断（検尿・血圧測定・血液検査・X 線検査）が行われました。それぞれ次回（7 月、11 月）の

炊き出しで健康結果を配布しています。

7 月、2 月の炊き出し・法律相談会では司法書士会の主催の元、司法相談、健康相談が行われました。またそれぞれで司法書士会による生活・司法クイズが行われ、野宿者の方たちと野宿生活における知識を蓄えるとともに親睦を深めました。加えて 2 月は勤医協の歯科医の方による歯科聞き取り相談が行われました。

4. 企画

理容師の折川さんのご協力をいただき、実施出来る会場において散髪を行っています。11 月の炊き出しでは市民ホールで初めて散髪が行われました。

また前年度実施され好評を博したビンゴ大会でしたが、今年度では生活保護生活者がビンゴで景品を当てた際に野宿生活者から数多くのクレームが寄せられるとのことから実施されませんでした。ただしビンゴ大会自体は人気のある企画なので、検討を重ね、新たな形で実施されることが望ましいと思われます。

その他、現在のところ実施されてはいませんが、” 会場内での BGM を流す”、” 生活保護の勉強会”、” 映画上映会” ” 歯科ブラッシングの講習会” といったものが企画案として提案されています。

5. 会場について

10 月、11 月の炊き出し・総合相談会から、札幌市民ホールを利用しました。また、前年度に引き続き 2 月の炊き出し・相談会ではかでの 2・7 を利用しました。どちらの会場も、札幌中心部に近く利便性が有り、また暖房効率が良いという利点がある一方で、会場を利用する他団体から苦情が来ないように細心の注意を払う必要があります。実際、11 月の市民ホールの炊き出しでは来場者が正面玄関前に多数集まったため混乱がありましたし、それ以前においても来場した野宿者の待機場所が無く、結果通路である会場の廊下を塞いだ為に苦情が来るということがありました。これらは来場者を整列させる不手際の問題であり、今後の炊き出しにおいても十分留意して行う必要があると言えるでしょう。



(09.11.3) 炊き出し・総合相談会の様子

5. 今年度の調査について

労福会では年に2回、夏と冬に人数調査をしています。これは、札幌市内にいる野宿者の現状を把握し、今後の支援の在り方を考えることを目的としています。夏は労福会独自の調査、冬は札幌市からの業務委託として行われます。

調査は、札幌市内各所を回り、調査員の目視によって野宿者をカウントする方法で行いました。荷物のみが置かれている場合はカウントせず、公衆トイレ（公園の障がい者用トイレ等）に鍵がかかっている場合は野宿者が1人いると判断しました。また巡回箇所は、事前調査や過去の調査結果、目撃情報等を参考にしています。

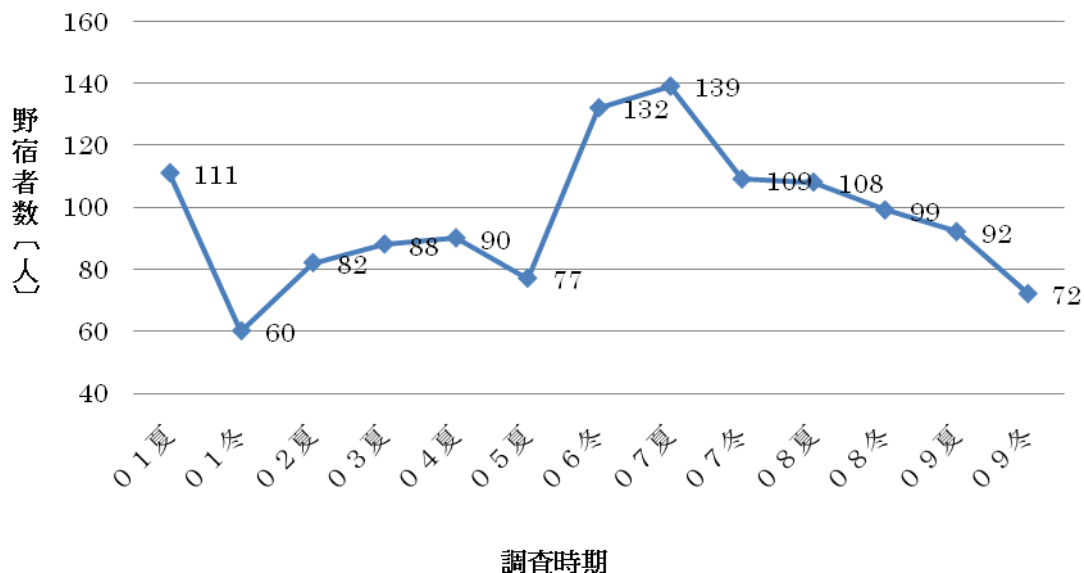


図 人数調査結果

結果を見ると、09 年度夏は 92 名、09 年度冬は 72 名と、野宿者数は減少傾向にあるように思えます。しかしこの数値には、調査員の巡回箇所において、調査員が野宿者だと判断した（できた）者しか含まれていません。たとえば、郊外の目につきにくい場所にいた野宿者や、最近路上生活を始めたばかりで見た目は一般人と変わらない野宿者などは、カウントされません。つまり、調査結果の野宿者概数が減少したからと言って、野宿者が多く自立していると一概には言えないのです。確かに生活保護を受けて脱路上した野宿者も多くいますが昨今の不況から考えて、新たに野宿者になっている方も少なからずいるのではないかと推測できます。

労福会の普段の活動（夜回り、炊き出し）は、市の中心部で行われています。そのため、

郊外野宿者の動向を把握できていない現状があります。しかし、郊外野宿者は調査でカウントされていますし、労福会との接点がない野宿者も確実にいるため、労福会としては活動範囲を広げる必要があります。今後は、札幌市に野宿者の支援団体があるとは知らずに、孤独に生活している野宿者が一人でも減るように、拡大夜回り等を通して関わりを持っていきたいと思います。

6. 寄せ場交流会

9/26(土)～27(日)に東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された全国地域・寄せ場交流会に参加しました。この交流会は、各地域における取り組みや課題を参加者で共有し、交流を深めることを目的に年に1回開催されているものです。交流会の主たる中身は、初日の全体会と2日目の分科会です。今回参加した会員は、中村・大瀧・中西・小澤・澁谷・但木・糸田の7名でした。

初日の全体会では、三人のパネラーが派遣労働者問題・野宿者支援運動から見えてくる世相・広範な連帯運動展望と課題を中心に議論を行いました。各地域の取り組みや課題を聞くなかで、この議論の本質は、「どうすれば路上生活者や支援活動に対する社会的理解が得られるか」という点にあるように感じました。「野宿者に対する理解はある程度持っているようにみえても、身近な場所で炊き出しをしようと言うと嫌がる人はとても多い。」という楡原民佳さんの意見は特に印象に残りました。いかにすれば野宿者支援が本当の意味で社会的な理解を得られるのか、今後も議論を深めていく必要があると思います。

二日目は各分科会に分かれて、各テーマについて、それぞれの地域の現状を踏まえて話し合いました。分科会には、第1分科会「障害と野宿」、第2分科会「排除・追い出し」、第3分科会「生活保護・医療」、第4分科会「施設・住居」、第5分科会「ジェンダー」、第6分科会「ホームレスと労働・失業問題」がありました。私（糸田）が参加した「障害と野宿」の分科会では実際に障害をもって生活している当事者の意見を聞くことを通して、障害者が社会的に孤立しているという現実・彼らに対する支援活動の課題について理解を深めました。話し合いの中で、障害者に対する社会的な理解が十分に得られておらず、いじめや冷たい仕打ちを受けている障害者が多くいること、障害者や体を悪くして働けなくなった人に対する社会保障がいまだに脆弱であることを改めて痛感しました。

交流会を通して、各地域の支援者の方と情報や意見を交換し合うことができたのは大変貴重だったように思います。他地域の取り組みからさらに学び、よりよい活動ができればと思います。

7. 他団体機関との連携

貧困問題は労働、経済などの社会的問題や、個人それぞれの事情が複雑に絡み合っています。そのため、当事者を支援する団体や機関による多様な支援策と、個別ケースに対応できるように、それら相互のネットワーク作りが、重要となります。すなわち、各団体が「点」としてだけ存在するだけではなく、特性を生かし合いながら「網」となって支援することができる体制の構築が望まれます。

その中、当会は今年度も、多くの団体や機関と連携しながら活動を行いました。以下、各団体との連携状況について記載します。

今後は、それら団体や機関とのさらなる連携の強化が望まれます。

・札幌市

5, 6, 9, 10 月に計 4 回、総合相談会を共催しました。

意見交換会を 2 回行い、今後の行政のホームレスに対する対応について話し合いました。

1 月に札幌市からの委託事業として、札幌市内野宿者概数調査を実施しました。

・札幌司法書士会

7, 2 月に計 2 回、法律相談会を共催しました。

・NPO 法人ハンド・イン・ハンド

炊き出しの際に、食事や衣類の提供をしていただきました。

・勤医協病院

当事者に、無料低額診療を周知するための活動を、夜回りの際などに協力して行いました。また、夜回りや炊き出しの際に出会った、体調の悪い人のために、無料低額診療制度を利用させていただきました。

・NPO 法人ベトサダ

夜回りや炊き出しで出会った急な対応が望まれる人へ、迅速な対応をしていただきました。

・反貧困ネット北海道

この団体は、2009 年 5 月に設立されました。札幌において、以下の 5 つの役割を果たすために活動されています。①主に関係組織・団体間の情報共有・情報交換、②情報提供、学習活動・啓発活動（啓発資料の作成・配布、シンポジウム等）、③支援活動、相談援助の連携、協働、④人材、資金、物資等の社会資源の調整・開発の促進、⑤研究及び政策提言

反貧困ネット北海道の作成した路上脱出ガイドを、夜回りなどで配布しました。

・ビッグイシューさっぽろ

新販売者の募集活動を、当会の夜回りで行いました。

・雇用・くらし SOS ネットワーク

脱路上生活を目指す人のために、住居の確保や生活保護申請の際に、ご協力いただきました。



(09.5.30) 炊き出し・総合相談会、健康診断の様子

8. 学習会

1. 学習会

今年度は、北星大学や北海道大学で定期的に学習会を行ってきました。また、それらの学習会以外に、スタッフが活動の中で必要とを感じるようになった知識について全体で学習会を開きました。8 月 29 日に行った全体学習会では、公衆衛生について成田允子さんが、生活保護制度について司法書士の安東朋子さんが講義してくださいました。成田さんのお話では、結核とインフルエンザ対策の知識が主な内容でした。これらについては、私たちが普段出会う野宿者の一人が結核にかかり入院するという出来事から、正しい知識を共有する必要性が差し迫り、スタッフの発案から学習会という形で実現に至りました。生活保護制度については、今年度の始め頃に経験の浅いスタッフが果敢に生活保護申請同伴を行う機会が多くあったため、改めて正しい知識を全体で共有する必要性があったため実施しました。

2. ケースカンファレンス

また、11 月 14 日には、スタッフが当事者をサポートする中で突き当たった問題や疑問について、経験のあるスタッフに相談し、各自の体験を紹介する場、問題解決の糸口を話し合う場としてケースカンファレンスを開きました。ケースカンファレンスについても、学習会と同様に、実際に活動するスタッフの声から実現に至りました。実現するまでには時間もかかり、迅速な対応とは言えませんでした。しかし、ケースカンファレンスを開いてみて、悩みを抱えたスタッフがその悩みを解消するだけでなく、他の参加者もその体験を共有することで、サポートについて理解を深めるきっかけとなりました。

3. 今後の目標

学習会・ケースカンファレンスは、私たちの活動に直結しており、自分たちの活動の助けにもなるものなので、できるだけ多くの機会を作ることが今後も必要といえます。しかし、今年度の学習会・ケースカンファレンスの回数は、普段の活動の蓄積と比較しても十分なものではありませんでした。スタッフの人数や時間などの制約はありますが、今後は学習会関連の担当者を置くなどして、スタッフ同士が活動について定期的に話し合い、各自の経験を次の支援に還元できるような体制をつくっていきたいです。

9. 広報活動

- ・今年度はこれまでに春号と冬号の 2 回、会報を発行しました。
- ・その他、新聞記事での紹介、関連雑誌への投稿がありました。

10.来年度に向けて

今年度は何度も強調されるように、10 周年という節目の年でした。記憶に残るイベントを開催したことで、これまでの活動を振り返り先輩スタッフのみなさんに感謝の気持ちを伝えられただけでなく、今頑張っているスタッフが勇気づけられる機会となったのではないのでしょうか。10 周年企画以外の今年度の活動は、これまでどおり地道なものでした。私たちの活動とは別に、札幌でも支援の輪がさらに広がりつつあると実感しています。具体的には、今年度中に、新しい関連支援団体の発足や大規模な相談会がありました。また、市民や民間会社から「住居を提供したい」「物資を提供したい」という話が何件もありました。しかし、札幌の野宿者の自立支援として、やるべきことはまだまだたくさんあると思います。では、当会は何をすることができるのでしょうか。これは、当たり前のことですが、会に関わるスタッフ次第です。現在のスタッフを見てみると、昨年度から徐々に会の運営に関わる学生が増え、また、積極的に当事者のサポートを行うスタッフが増えたように思います。このことから、来年度の発展に期待しています。活動の意義・目的を見据えていれば、これまでの活動を一工夫することや、新しいことに挑戦することも難しくないでしょう。ただ、第一線で活躍するスタッフだけでは会は回らないので、活躍するスタッフをサポートするスタッフが不可欠です。会員のみなさんは、所属や職業が様々で活動に係わることができる範囲も様々だとは思いますが、それでも、一人ひとりが「できる」ことを見つけて当事者や当会スタッフを少しずつサポートすることができれば、会全体の活動の幅がもっと広がるのではないのでしょうか。来年度も多くの市民を巻き込みながら、ホームレス状態の人たちに寄り添い、野宿者自立支援を続けていきます。

11. 私と労福会

『飯の種』 小笠原 淳（フリーライター）

ずいぶん長いこと、労福会で喰わせて貰っております。

こういう会はほかにはない、珍しい、学生の身空でよくやるもんだ、たいしたもんだ、という感覚は何年経っても巷間に残り続けていて、今もそのような理由で私は原稿料を手にすることができています。ひと一人喰わせることのできる学生集団というのは聴いたことがなく、本当はそこが最も珍しい。

こういう活動が当たり前のこととしてもっと広く知られるようになったら、私の綴るような作文にも価値がなくなります。当たり前の話をねちねち書き続けてもしょうがない。そんな需要はないということで、どこの編集者も原稿を買ってくれなくなります。そうすると私は食費や酒代や煙草代に事欠き、さらには各種の公共料金を納められなくなり、最後にお家賃を滞納して狭い部屋を追い出され、着の身着のままで屋根を失うことになる。たちまちホームレスです。

でも安心。だって、労福会がありますから。夜回りの順路を熟知している私は、きっと APIA ドームの集合場所に最も近い椅子に腰掛け、背中を丸めて罐コーヒーを受け取ることでしょう。「やあやあ待ってたよ。ぼくはその昔、世界的ジャーナリストとして決死のレポートをあまた世に問い、ついでに諸君の先輩たちに路上支援の骨法奥義を手取り足取り指導してあげたものさ」。未来の学生さんたちは私の言葉を信用せず、「こころのセンターという施設をご存じですか」と心配そうに問うてくるのです。

しかしさいわい、否あいにく、札幌の路上は今もなお、またこれから暫くの間も、変わらず労福会を必要とし続けるのでしょう。野宿者・路上生活者が街から姿を消す兆しはなく、それはたいへん愁うべきことですが、しかしその蔭で鉛筆より重いものを持ってないおっさんひとりが救われ続ける。まことに不条理でありよくよく因果なことですが、そういうことも地上にはあるのです。

ええ。そういう福祉もあるのです、たぶん。

追記。

昨年度は発足 10 周年の節目を迎えるとともに、関係者の皆さんがそれぞれに人生の岐路を迎えた 1 年でもありました。木下代表と今さん（旧姓）との華燭の典は記憶に新しいですが、前後して元会員の安部くんが四国は高松で祝言を挙げ、同じく OB 寺嶋くんからも慶賀すべき報が届きました。かく言う私も、昨年度には間に合いませんでしたが半年ほどのちに年貢を納める予定です。

人生、何が起こるかわかりませんよ、南部さん。

『リベラルなアナーキストなんていいじゃない』 大滝雅史（北海道大学文学部 4 年）

まあいまさらな感じもするのだけど、労福会に関わってなかったら、僕の大学生活はそんなに奇抜なものになってなかったんじゃないかしらんなどと思う。それっていいこともあるし、よくないこともあると思うけど、でもまあよかったような気がする。労福会の活動に関わって学んだのは、なんていうか謙虚さだと思う。「お前のどこが謙虚なんだ！」とかいうツッコミが飛んでくるかもしれないけど、いや、たぶん謙虚さを学んだんですよ。それは一般的な表現を使うと、「リベラルさ」とでも言えるかと思う。よく人の話に耳を傾けて、すぐに単純な結論を下さないということを。野宿者の置かれている現状なんていうのは、当たり前のように大学に来てモラトリアムを謳歌している人間にはようわからん場合が多い。当然のように教育の機会を与えられて、「安定した大手企業の正社員の口を得て当たり前」なんて思ってる（思い込んでいる）世間知らずに分かるはずがないとも言える。でも、多くの場合、バカな大学生ども（というのは自分も含むのだが）は「自分は分かってない」ということを分かってない。要は「無知の知」が足りない。

僕も労福会の活動に関わりだしたころは色んなことがよくわかっていなかった（いや、いまもそうかもしれないんだけど）。で、「俺は好きで野宿やってるんだよねえ」とかいうおじさんなんかを見て、「え、こういう人って支援に値するの？なんで自立しないの？」とか思っていた。要は、彼らの言葉を額面どおりに受け取っていたのだ。で、最初は「自立支援ってなんじゃろう。意味あるのかしら」などと思っていたのだけど、ことはそんな単純じゃないと段々気付くようになる。だって、簡単に自立できないのだから、それは言わば「負け惜しみ」のようなもので、そのまま受け取っても仕方ないのだ。例えば生活保護をもらったって、それですぐに安定した仕事を手に入れて、経済的に自立できるわけじゃないし（としたら、また路上に放り出される危険がある）、精神的な安定が得られるとも限らない。そりゃ路上の方が生活として不安定だし、「人間的な生活」じゃないのは確かだけど、でも、じゃあ誰も話し相手がいないような状態で、一人ケースワーカーの就労指導に怯える生活が果たして「人間的」なのかと。だから、僕たちが野宿者のことを「分かっている」「分かった」などと思ったり、もしくは分かった気になるのは傲慢だと思うのだ。

でも、だからといって、僕たちが彼らのことを何にも分からないというのも、また違うと思う。だって、やっぱりおんなじ人間なんだもの（なんか「みつを」みたいだな）。喜びや悲しみがあって、というのはそんなに変わらない。だから意志の疎通が全く出来ないわけでもないし、一つの目標に向けて一緒に行動することもできるはず。ただ、ちょっと「言葉づかい」が違うだけで。余談だけど、これって最近のアナーキズムにおいてよく言われることとちょっと似ている。「訳通不可能性」なんて用語があって、それぞれ個人は完全に分かり合えたり、一緒に感じたりすることはできない、という意味なんだけど、でも、そのそれぞれの違いがあるからといって、何にも分かり合えず、全く行動もともにできない

というわけでもない。だからアナーキズムはわりと意見の違いを超えて行動できる（らしい）。これが野宿者の理解にも当てはまる。

だから、なんだろう…言ってみればそれってけっこう人間についての本質的な話なのかもしれない。自分が見ていることや感じていることは、個人的なもので、主観的なもので、決して他者と同じことを思うことはできないのだけど、でもだからといって全く分かり合えないわけでもない。このバランスって多分に重要で、その土台となる「物事を簡単に分かった気になるな」という自分に対する戒めは、けっこう重要な気がする。それが労福会で得たものであれば（いや、そうなんだけど）、きっとそれはよかったことなんだろうと思う。あ、わりとまともな文章になってよかった。

勝又茜（北海道大学文学部 2 年）

去年の 5 月、同じ講座の先輩に誘われて会議・夜回りに参加し、以後ちょこちょこと労福会の活動に参加するようになった。もともと自分の生活とあまり密着していない大きな範囲の事柄を考えることが苦手で、会の名称にも含まれている“労働”や“福祉”にもものすごく関心があったわけではなく、だから正直に言ってしまえば、何かはっきりとした意図や目的意識を持って会員になったわけではない。

だがそんな自分でも、というかそんな自分だからこそ、（毎回ではないけれど）夜回りや炊き出しへの参加を続けている一番の理由が最近わかりかけてきた。それは、たんに、知り合いになったホームレスの人たちが気になるから、というものだ。「あの人この前夜回りで会ったときは機嫌悪かったけど今日はどうかなあ」とか「あの人はこの前夜回りで会ったときは機嫌悪かったけど今日はどうかなあ」とか「あの人はこの前夜回りで会ったときは機嫌悪かったけど今日はどうかなあ」といったただたんに“個人的に気になる”という思いが活動に参加している一番の原動力になっている……ような気がする。

といっても、最初の頃はやっぱり自分と当事者とを“支援する人”“支援される人”という単純な図式でとらえてしまっていたし、だから毎回自立に向けた話をしなければならぬと思いがちだった。だが、自分はその人のことをひとりの人間として気にしているんだな、と気づいてからは、まずは信頼関係を築こうと意識するようになった。

このことは、私が夜回りでよくまわるコースには何年も野宿生活を続けている方が多い、という事情もあるのかもしれない。ただ、とにかく早く自立に向けて話をするのか、それともあせらずゆっくり話をしていくのか、というのは当事者の事情・状況によって違うにせよ、ひとりの人間対人間として接しながら関係を築いていくことが重要なことになりはしないと思うし、これからもそういう風に関係を築いていけたらなあと思う。

澁谷洋平（北星学園大学 3 年）

労福会に入って一年半が経とうとしています。今年度は事務局次長という役職に就いたので、積極的に関わることができました。同伴やフォローアップなども行うことができました。

今年度の経験を経て、一度、社会からフェイドアウトした人間が社会復帰することは大変なことだということを痛感しました。まず、なぜフェイドアウトしたのか根本的な部分から見ていかなければいけません。大体は仕事を辞めて働けなくなったケースがほとんどである。さらに、仕事ができなくなった理由にも人によって様々であり、怪我をした、病気を発症した、リストラなど、色々なケースがあります。しかし、社会復帰を図ろうとしても、すぐに復帰は困難です。働いたとしても、病気が再発したりするなどして、また働けなくなることもあります。そこで必要となってくるのがフォローアップです。生活保護で住居を確保できたからといって安心なわけではありません。路上から申請までのプロセスよりも申請してから社会復帰までもプロセスの方が大切です。申請してそのまま放置してしまうと、また、路上に戻ってしまうことがあります。なので、フォローアップが必要となります。その人がなぜ路上に来てしまったのかを見つめなおし、社会復帰までのプロセスを考えていかなければいけません。今の労福会に一番必要なことではないかと思います。炊き出しや夜回りも必要なことではありますが、フォローアップが一番大切であると思います。少しでも野宿者を減らしていくためには、再び路上に戻さないことが重要であると考えています。生活保護の申請をたくさん行い、ただ家に入って生活保護受給者を増やしても、「ホームレス」を減らしたことはならないです。むしろ居宅に入っても「ホームレス」のままです。労福会が「ホーム」となり「ホームレス」を減らしていくことがこれからの活動の鍵となってくるのではないのでしょうか。

中村親爺（市民ボランティア）

労福会入会のきっかけは、たまたま労福会木下代表と同じ「全国手話通訳問題研究会」（手話を通して聴覚障害者に対する諸問題を学び、聴覚障害者のくらしと権利を守ることを目的に掲げ、1975?年設立、全国各地会員 1 万人）組織に所属しており、その伝手で昨年 7 月「札幌のホームレスの現状」と銘打って近所の甘木教会でミニ講演会を開きました。その時の木下さんの講演を聴いた思いを漫然とダラダラ引き摺っていました。

が、ここで皆さんもご存知の、かの釜ヶ崎で二畳間のアパートを根城に活動している本田哲郎神父の述べられている以下のくだりを「釜ヶ崎と福音」（岩波書店）で読みました。

『私たちは社会において抑圧されている人々についてついつい「相手の立場に立とう」と考えてしまう傾向があるけれども、「相手を理解しようと思ったら英語の understand(理解する)・・・つまり Stand Under Others、相手よりも下に立つこと。同じところに立てないのだから、教えてくださいという学ぶ姿勢を持つことです」と述べておられるそれが必要だと本田神父は言う。』

昨年 9/5 の夜回りデビューでMおじさん(ベトサダ真鍋語?)との衝撃的出会いです。幸いベトサダ真鍋さんの支援で生活保護を 6 ケ月掛けてようやく受給、脱路上したとか。彼には聴覚障害というハンデがあり、他者とのコミュニケーションに苦労があるし、情報保障がほとんど無い境遇を知って今に至っております。幸い私は聴覚障害者と 40 年近く付き合っており手話は若干出来ます。がここでMおじさんとの目線ですが、ついつい上目線になっていないか考えるとその時の時分は恥ずかしながら彼の風体やあの場所での時間、パンと缶コーヒーをあげる、と何と不遜で不寛容で施してやる、コレが立場が逆なら殴っていたかな。でも彼は久し〜振りに手話を使って話が出来る人間に出会った喜びが勝っていただけだと後で気が付いた。この間通算 16 勝 28 敗(1/22 現在では 7 勝 23 敗)という出会いとすれ違い(待ち合わせのすっぽかし)で少しずつ彼も心を開いてくれ、「問わず語り」で訥々と昔話をしてくれるようになった。またその話の中から行政への取次ぎ、居住区のケースワーカーやろう相談員を通して炊出し相談会での健康診断拒否から自ら受診、通院する、補聴器の不具合を私を通して訴えたと除除にささやかではあるが確実に変わってきた。彼の真の社会的自立の日が来るまで「Not doing, but being」でボチボチ向き合おうと思っております。

また、これからは我が家の近間(手稲・発寒・琴似地区)で昼回り(デイパト)でおじさん達の話し相手になり、行政や支援団体への橋渡ししが出来たらと思うこの頃です。

中村江里加（北海道大学法学部 3 年）

今年度の事務局長をなんとか務め、今まさに「私と労福会」を書きながら年度末をむかえています。今年度一年間で経験したことは、新しいことばかりでここに延々と書くことができるのですが、とても長くなるので別の機会に直接話を聞いてやってください。ここでどうしても書きたかったことは、会員の皆さんに「ありがとうございました」と言いたいということです。皆さんとは、いつも会う学生スタッフだけでなく、一度もあったことのない会員さんも含め「皆さん」です。私は経験も浅く、とんちんかんなことを言ってとんちんかんな行動をとることもあったはずですが、事が丸く収まっているのは皆さんのサポートがあったからだと思うからです。

事務局の仕事は、言葉通り「事務」作業も多く、モチベーションが下がることもありま

すが、そんなときに誠実に活動しておられる真鍋さんたちの姿や頑張っている他のスタッフの姿を見ると、むしろ事務局長をやっていてよかったなと思えました。

当事者のおじさんたちとは、はじめから抵抗なく話をしていましたが、今年度は特に「事務局長」という肩書を利用して、あれこれ話をさせてもらいました。頑固な人、お茶目な人、気難しい人、いろいろな人に夜回り・炊き出しで出会いました。

では来年度も、頼れる労福会をつくっていきましょう！

成田 允子（市民ボランティア）

私が出会う路上生活となった彼らは、中高年齢層の男性で、結婚歴がないかあるいは結婚歴があっても離婚等をしている人が多いため家族・親族の支援が得られにくく、更に仕事を失うことによって、一般社会の中から孤立してしまった人達です。

彼らは、仕事・家族・住居の問題が複合的に絡み合い、病気やけが、アルコール依存症などの心の病気、借金問題などが複雑に関連しているので、一朝一夕で解決できない問題が多々あります。

しかし、路上生になった原因はそれぞれだとしても、彼らの人生の軌跡を垣間見ると、同じ街に暮らす人間として看過できない事だと考えます。

彼らは、「助けてもらおう発想はなかった」、「今の自分は努力しなかった結果だからしかたがないと、つい自分を責めてしまう」、「相談すれば負け組になる」、「1度でも助けを求めたらもうそこで終わり」というように、今の社会的風潮に呼応したかのように自己責任を言う人が多いように思います。

イギリスの社会学者ゴードンらによると、社会的に排除されていく過程は、4つの次元で行われると言われています。①収入源からの排除、②労働市場からの排除、③サービスからの排除、④社会的関係からの排除、だそうです。

そして最大の問題は④の社会的関係からの排除であると思います。

私は地方で勤務しているため、夜回りに行く時間がとれないので、通勤途中や所用で街を通る時に彼らに声をかけるようにしています。

長年路上生活を続けている人に声をかけると、「うるさい！まるで山の神だな」と言われてしまいます。彼は彼なりに精いっぱい頑張っているのでしょう。

しかし、会う間隔がしばらく空くと「今忙しいのかい」とか「この間変な人に声をかけられたさ」などと話をします。強がってはいても、やはり誰かと繋がっていたいのだなあと言う事がわかります。

私は同じ街に暮らす人間として、地縁や血縁を乗り越えて彼らを暖かく見守り、支援を継続することが大切だと考えています。

声高に自己責任論が述べられる一方では、援助を申し出てくれたり、暖かい声かけをして下さる市民の方も大勢います。

どのような状況になっても住みよい街である事が、路上生活の彼らだけではなく、私たち全員の課題であると思います。

松田翼（酪農学園大学）

「楽しいから行っているんだよ。」誘ってくれた先生はそう話をしてくれた。野宿者を支援する活動には興味があったのでそれをきっかけに足を運んでみた。いわゆるホームレスといわれるおじさんと一緒に座って話を聞いた。『聞いてはいけないことなどあったりして、ちょっとおっかないな。』というのは内心なくもないことだった。しかし、お茶を飲みながらおじさんのこれまでの話を聞くとごく当たり前のことに気付いた。家がなくても普通の人なんだと。おじさんは50代ぐらいだったのだろうか、浦河方面で馬の世話をしていたらしい。そして晩になると読書をするのが趣味だったのだとか。仕事がなくなって、路上生活になったけど、労福会の炊き出しにはよく参加するようになったのだとか。大学に帰ってから誘ってくれた先生と話をしたことが印象深い。『路上に酪農学園大の女の子が倒れていたら通報されるだろうけど、ホームレスの方が倒れていても放っておかれるんだ。』

実際に現場に足を運ぶことの大切さ。人間の価値について。社会の成り立ちについて。炊き出しに参加して思うことがありました。マザー・テレサが祈るように、『人は人であるという理由だけで、どんな人も愛するために』とそれを行ってゆけるように、道を求めてゆきたいです。ありがとうございました！